『ミトリダート』の謎

——あるいはその自己同一性について——

田　村　真　理

はじめに

『ミトリダート』は1673年に初演されたラシーヌの第9作目の悲劇であるが，『アンドロマク』から『フェードル』に至るラシーヌの盛期の7編の悲劇のなかで，おそらく最も論じられることの少なく，また最も愛好家に恵まれない悲劇であろう。

レイモン・ピカールは，プレイアド版の序の冒頭で，『ミトリダート』を，「最も悲劇的でないラシーヌの悲劇」としている[1)]。ここには激しい情熱により錯乱する人物も，あるいはラシーヌがギリシアに取材した悲劇の特徴とされる，いわゆるギリシア的な呪いや宿命の観念も見受けられないからである。

『ミトリダート』は『ブリタニキュス』，『ベレニス』に続き，ローマ史に取材し，ローマの軍事的侵略に対して40年間戦ってきた梟雄ミトリダートの死を取り上げている。この主題の選択については，コルネイユとの競争関係が決まって言及され，コルネイユが得意とする歴史・政治悲劇の分野へのラシーヌの挑戦と考えられている。また，アントワーヌ・アダンは，主題のみならず，『ミトリダート』のどんでん返しや驚かせる出来事がたっぷりの構成，『ブリタニキュス』あるいは『ベレニス』序文でラシーヌが自賛したことで有名な単純な筋立てとは言いがたい構成や，ミトリダートが死を目前にして恋するモニームを息子のクシファレスに委ね人々の和解でおわるという融和的な，前作の『バジャゼ』とは大きく異なる結末も，コルネイユばりであると指摘している[2)]。

あるいはまた，こうした構成や結末に，当時の人々の好み，つまり，愛好されはじめていた，オペラや英雄喜劇への嗜好との妥協を見ることもできる。『ミトリダート』は，17世紀においては非常な成功をおさめ，王と宮廷からとくに愛好され，繰り返し御前上演された悲劇で，17世紀のヴェルサイユの趣味に適合していたのである[3)]。

しかしこの悲劇の美的完成度に関して批評が提起する最大の難点は，このミトリダートとロー

マの闘争というコルネイユばりの歴史・政治悲劇の面と，ミトリダートと彼が恋するモニームと彼の息子クシファレスをめぐる恋愛ドラマの面の併存であろう。ピカールは，やはりプレイアド版の序を，「例えば『バジャゼ』では，恋愛悲劇と政治悲劇が，絡み合い，殆ど混然としている。『ミトリダート』では，それを認めねばなるまいが，恋愛悲劇と政治悲劇は併置されているに過ぎない[4]。」と結んでいる。そして，ミトリダートがクシファレスにモニームを譲る結末については，ロラン・バルトやリュシアン・ゴルドマンのように立場の異なる批評家たちがそれぞれに疑義を呈している[5]。

このように低い評価，冷たい関心にさらされ，ラシーヌ的でも悲劇的でもないと言われる『ミトリダート』ではあるが，そこにおいても，他のラシーヌ盛期の作品に共通する幾つかの要素が，同様に認められることは事実である。『バジャゼ』で聞き慣れたメロディーが，あるいはやがて『フェードル』で鳴り渡る和音が，『ミトリダート』のここかしこに現れる。本論ではそうした共通要素の一つである，プロットにおける秘密にまず視点を置いて，『ミトリダート』と他の作品との異同を検討し，『ミトリダート』の特異性を探ることにしたい。

『ミトリダート』の秘密

登場人物たちの織り出す関係の面から見ると，ラシーヌ盛期の総ての作品に見られる王または父と若い恋人たちの対立が，この作品においても人物相互の主要な関係となっており，この対立が生み出す「秘密」が筋立ての主要な動因となっている。ことに，恋人達の恋が禁じられた恋で命にかかわる秘密であるという点で，『バジャゼ』『フェードル』と類似しており（それに反して『ブリタニキュス』，『ベレニス』，『イフィジェニー』では，若い恋人達の恋は公然のものとされている），また，この恋人達のいずれかに対して，王／父の側から満たされない近親相姦的な欲望が向けられていることも，全く同じである。

プロットについては，『バジャゼ』のアミュラ，『フェードル』のテゼ同様，『ミトリダート』の王ミトリダートは戯曲の冒頭で不在で，それが恋人達つまりクシファレスとモニームがお互いの恋を打ち明ける契機となる。テゼの死の知らせと同様，ミトリダートの死の知らせも誤報で，彼は生還し，これが他の人物に影響を与え，筋の展開の大きな動因となる。ミトリダートは，モニームを疑い，『バジャゼ』のロクサーヌがアタリードに対してするように，策略を弄して，彼女から本心を聞き出す。

より詳しく『ミトリダート』の「秘密」を見てみよう。ミトリダートとその婚約者モニーム，二人の息子ファルナスとクシファレスはそれぞれ秘密を持っているが，まずクシファレスの秘密はモニームへの恋である（「しかしアルバートよ，これは昨日，今日の秘密ではないのだ」《Mais

ce n'est point, Arbate, un secret de deux jours.》38[6])。)ファルナスの秘密はモニームへの恋とローマとの「密約」(《le traité secret》281), モニームの秘密はクシファレスへの恋で, これらはすべて, 権力者でかつ残忍な策謀家であるミトリダートに対して隠されねばならない。ミトリダートの死の誤報により第1幕の初めでこれらの秘密は一部顕わにされるが, 第1幕第4場のミトリダート生還の知らせをうけ, 第5場はファルナスがクシファレスにお互いに秘密を守ろうと提案して終わっている。第1幕をしめくくるファルナスのこのせりふは, 第2幕以後の展開の主要な興味を設定しているが, ここには秘密《secret》, それを知ること《savoir》,《pénétrer》, 何かを隠すこと《cacher》, それを暴くための策略《détours》,《adresses》, 欺くこと《tromper》, 手掛かりとなる言葉《discours》, 忠実であること《fidèle》, 裏切る《trahir》といった秘密につきもののテーマがすべて揃えられている。

Soyons-nous donc au moins fidèles l'un à l'autre :
Vous savez mon secret, j'ai pénétré le vôtre.
Le Roi, toujours fertile en dangereux détours,
S'armera contre nous de nos moindres discours.
Vous savez sa coutume, et sous quelles tendresses
Sa haine sait cacher ses trompeuses adresses.
Allons. Puisqu'il le faut, je marche sur vos pas.
Mais, en obéissant, ne nous trahissons pas.

(「では少なくともお互いに忠実であろう。あなたは私の秘密を知り, 私はあなたの秘密を知った。王は常に危険な策略に富み, 我々の言葉のほんの端をとらえてでも我々を警戒するだろう。あなたは彼の習慣を知り, どんな優しさの下に彼の憎しみがその人を欺く計略を隠し得るかを知っている。さあ, そうせねばならぬのだから, 私もあなたに見習おう。しかし, 王に服従しつつ, お互いに裏切らぬようにしよう。」367-374)

第2幕の初めでは, モニームと腹心のフェディームの対話を通じて, 読者にモニームもまたクシファレスを愛していることが知らされる。このように人物相互の関係の情報が少しづつ効果的に読者に提示されることで, 読者を驚かせ, 興味をひきつけるのは,『バジャゼ』,『フェードル』にも共通の手法であり, 読者に情報に関して特権的な立場に立たせるのが, ラシーヌの特徴であると考えられる。第2場でミトリダートが登場し, これ以降彼は, 策略を用い試行錯誤しつつ秘密を暴いていくが, その言動は彼の思い及ばぬところで, 他の人物における情報の分布の状態をも変えていく。

『ミトリダート』の倫理，あるいはモニームの自己同一性と自律性

このように，秘密をめぐって基本的な状況が設定され，展開することは，『ミトリダート』と他のラシーヌ盛期の悲劇の共通点であり，特にその基本的状況の設定，展開において，『ミトリダート』は以上に述べたように『バジャゼ』，『フェードル』と多くの類似点を持っている。しかしながら，主要な登場人物によるこれらの状況の心理的な受け止めかた，あるいは対処の仕方は，『ミトリダート』と『バジャゼ』，『フェードル』とは大きく異なっている。その違いは，女主人公モニームの人物の設定によるところが大きい。

モニームは，いわゆるラシーヌ的女主人公として一般に思い浮かべられる情熱の虜となり錯乱する女性，エルミオーヌ，ロクサーヌ，アタリード，フェードルらに代表される女性像とは最も対極に位置しており，それが，冒頭で触れたように，『ミトリダート』にラシーヌ的でない悲劇という印象を与えている。モニームは非常に好ましい女性像として，多くの批評家，男性のみならず女性の批評家にも賛美されてはいるが[7]，錯乱する女主人公に比べ，語られることは少ない。しかし，ラシーヌ悲劇の世界における「美徳」のモデルとして，モニームのありようは検討に値する。

モニームが置かれている状況はフェードルと酷似しているが，フェードルがテゼの妻であるのに対し，モニームはいまだミトリダートの婚約者でしかない。また，フェードルのイポリットに対する恋はテゼとの結婚後に芽生えたのに対し，モニームはクシファレスと以前から愛しあっていたとされている。より以前に芽生えた愛の方が以後に芽生えた愛よりも正当性を持つのは，ジュニーとブリタニキュス，アタリードとバジャゼなどにも見られるラシーヌの世界の原則である。つまりこれらの状況はモニームを美化する意図により設定されていると言え，逆に言えば『フェードル』においてラシーヌは状況をより先鋭化しているとも言える。

モニームが従う行動の規範は，まず権威《autorité》への服従《obéissance》である。ミトリダートがモニームに求婚したとき，「それは（彼女の）一族にとっては至上のおきてであった。従わねばならなかった」（《Ce fut pour ma famille une suprême loi : /Il fallut obéir.》254—5）．そしてそのために彼女の父はローマに殺され，それを理由にモニームはローマと密通するファルナスの求愛を退けている（II，3）。ミトリダートの求婚に対しては，彼女は冷たい義務的な態度で服従を示している。

> [...] Ceux par qui je respire
> Vous ont cédé sur moi leur souverain empire;

Et, quand vous userez de ce droit tout-puissant,
Je ne vous répondrai qu'en vous obéissant.
(「私が生をうけるにあずかった人々は，あなたに私に対する彼らの至上の権威を譲りました，そしてあなたがこの万能の権利を行使なさる時には，私はただあなたに従って応えるのみです」547-550)

このような権威と義務の関係からミトリダートと結婚する定め《loi》があり，「不幸にもその義務にしばられて」(《de mon devoir esclave infortunée》643) いる以上，クシファレスに恋を語らぬことも彼女の義務である(「厳しい義務が私に沈黙を課しています」《Un rigoureux devoir me condamne au silence;》676)。

しかしミトリダートの権力に対する単なる盲目的な従順さや恐怖でこれらの義務に従っているわけではないことが，このクシファレスに対する恋で明らかになる。なぜなら彼女はクシファレスに対する恋を，自己の名誉《gloire》，尊厳《dignité》のために抑圧すべき「ふさわしからぬためいき」(《quelque indigne soupir》730)，「罪深い考え」(《la coupable pensée》736)，「わが恥」(《ma honte》738) とみなし，それを克服しようと努力するからである。

Car, quel que soit vers vous le penchant qui m'attire,
Je vous le dis, Seigneur, pour ne plus vous le dire,
Ma gloire me rappelle et m'entraîne à l'autel,
Où je vais vous jurer un silence éternel.
(「なぜなら，私をあなたへひきつける感情がどうあろうとも，申し上げますが，そして繰り返しはいたしませんが，私の名誉が私を呼び戻し，私を祭壇へ連れていきます，そしてそこで私はあなたに永遠の沈黙を誓うでしょう」695-8)。

この引用に見られるように，あくまでもモニームはここで「名誉」《gloire》という言葉で表現されている自らの価値観に従って義務を果たそうとしているわけである。このような価値観の自律性はモニームにおいて確固たるもので，それは例えばこの引用のII，6で，クシファレスに対するミトリダートの誤解に基づく命令，モニームを見張るようにという命令に逆らって，クシファレスを遠ざけようとすることで強調されている。

同時にここで注意すべきことは，モニームがクシファレスへの恋を語らぬことで，彼女の義務を果たそうとしていることである。彼女は彼女のクシファレスへと向かう心《le penchant》を認めたうえで，彼と恋を語らぬこと，自らに沈黙を課すことで義務を果たそうとしているのである。あたかも語られぬことは存在しないことであるかのように，あるいは愛を語ることがあたかも愛

し合うことにほかならないかのように。実際，すべての心身の活動が言語活動に置換され収束しているラシーヌの悲劇世界では，愛することは「愛している」と言うことであり，モニームはクシファレスとの甘美にして残酷な愛の告白の場面を終わらせるとき，

> Plus je vous parle, et plus, trop faible que je suis,
> Je cherche à prolonger le péril que je fuis.
> Il faut pourtant, il faut se faire violence;
> (「あなたと話せば話すほど，弱い私は，避けねばならぬ危険を長びかせてしまう。しかし己に鞭をうたねばならぬ」741-3)

と語っている。このようにしてモニームのクシファレスへの恋という「秘密」のテーマに，沈黙すること《silence》,《se taire》と話すこと《parler》，或いは告白《aveu》のテーマ，『フェードル』などに共通のテーマが付け加えられる。

さて，このように隠し，抑えたクシファレスへの恋を，モニームはIII，5でミトリダートの策略により明らかにしてしまう。ここでミトリダートはまずモニームにクシファレスとの結婚を提案し，彼女が取り合わないと，ファルナスとの結婚を強い，彼女を困惑させ，

> En quelle extrémité, Seigneur, suis-je réduite!
> Mais enfin je vous crois, et je ne puis penser
> Qu'à feindre si longtemps vous puissiez vous forcer.
> (「私はなんという窮地に追い込まれたことでしょうか。でも私はとうとうあなたを信じます，こんなに長い間あなたが無理をして偽っていられるとは思えませんから」1096-8)

と彼女の告白を引き出すのである。ここで重要なことは，モニームが初めはミトリダートの真意を疑い，用心していることである。ラシーヌの世界では，そのプロットにおける「秘密」の重要性からも推察できるように，ある人間が率直で裏表がなく「透明」であるか，逆に何か秘密を持ち「不透明」であるか，あるいはまた他者の裏表や秘密を見抜くことが出来るか（「能視」），出来ないか（「非能視」）が重要であるが[8]，ここは，モニームという「能視」を備えた聡明な女性が，ミトリダートの，よりうわての悪辣な罠にはまる場面であり，しかもその直前にミトリダートの独白で読者に罠を罠と知らしめることによってサスペンスを盛り上げ，読者の情動的な参加を狙っているのである。ミトリダートは直前のIII，4で言っている。

S'il n'est digne de moi, le piège est digne d'eux.
Trompons qui nous trahit : [...]
Feignons;et de son cœur, d'un vain espoir flatté,
Par un mensonge adroit tirons la vérité.

(「私にふさわしくないとしても罠は彼らにふさわしいのだ。裏切り者を欺こう，[……]偽ろう，そして彼女の心から，空しい希望で喜ばせ，巧みな嘘で真実を引き出そう」1030-4)

自分の判断が誤りで，ミトリダートに欺かれていたことをはっきりと知ったモニームは，王に逆らうなというクシファレスの忠告を退け，IV，4でモニームに婚礼を急がせに来たミトリダートと対決する。彼女の武器はまず「なんですって，ではあなたは私を欺いていたのですか」(《Quoi? Seigneur, vous m'auriez donc trompée?》1284) というせりふに至る一連の言葉のアイロニーである。しかしすぐに彼女は本来の率直さを取り戻し，クシファレスへの恋を彼に告白し，知られた以上，ミトリダートとは結婚出来ないと告げる。

Vos détours l'(feu) ont surpris et m'en ont convaincue.
Je vous l'ai confessé, je le dois soutenir.
En vain vous en pourriez perdre le souvenir;
Et cet aveu honteux, où vous m'avez forcée,
Demeurera toujours présent à ma pensée.

(「あなたの策略がそれ（恋）を暴き，私に認めさせました。私はあなたにそれを告白しました，そして私はそれを認めねばなりません。あなたがそれを忘れても無駄です。あなたが私に強いたあの恥ずべき告白は常に私の思いから去らないでしょう」1344-8)

ここでモニームは，語られ，明るみにだされた己の恋に行動方針を合わせ，死を覚悟してミトリダートとの結婚を拒絶することで，すでに語られてしまった言葉と行動を一致させ，言動の上での自己の一貫性，同一性を保とうと計っているのである。ミトリダートの策略による告白の以前も以後も，モニームの行動は，この自己一貫性を保つための試み，彼女に可能なささやかな自由の範囲における自律的な試みであると言える。「秘密」は一人の人間のうちに「見かけ」と「実際」，裏と表の差を作りだし，「不透明」な存在へと変えるが，この「見かけ」と「実際」の違い，裏表のあること，「不透明さ」は，悲劇の世界の倫理の常識ではつねに悪であり，バジャゼもフェードルも秘密を抱えて良心の苦しみを味わっている。その中でモニームは，この見かけと実際の

差異を無くし，自己の一貫性を保つために最も克己的な努力をしていると言える。

この努力は，彼女の立場が弱く，自らの言動を自ら決定する裁量の範囲，すなわち自律性が狭く限られているために，愛の断念や死の覚悟のように，大きな犠牲を払わざるをえないものとなる。すでに第1幕冒頭から彼女は，

> Au pied du même autel où je suis attendue,
> Seigneur, vous me verrez, à moi-même rendue,
> Percer ce triste cœur qu'on veut tyranniser,
> Et dont jamais encor je n'ai pu disposer.
>
> (「私が待たれている祭壇のもとで，私自身のものとなり，人々がほしいままにし，私には決して思い通りにできなかった私の悲しい胸を，私自身刺し貫くのを見るでしょう」159-162)

と自律性を奪われていることを嘆いているが，この嘆きは，V，2でミトリダートの命令で自殺用の毒を持参したアルカスに，

> A la fin je respire;et le ciel me délivre
> Des secours importuns qui me forçaient de vivre.
> Maîtresse de moi-même, il veut bien qu'une fois
> Je puisse de mon sort disposer à mon choix.
>
> (「やっと息ができる。私を無理に生かそうとするうるさい助けから天が私を解放してくれる。天は，私が私自身のあるじとなって，私の運命を私の選択どおりにできることをのぞんでいる。」1519-22)

と喜びと自律への願望を述べている場面と対応する。そして，付け加えるならば，モニームが恋するクシファレスは，父ミトリダート，兄ファルナスと異なり，寛容寛大（《un cœur si magnanime》140 ,《ce cœur magnanime》707）で，他者の自律を尊重する人間として描かれている。冒頭の第1幕第1場で，状況を説明したあとクシファレスはアルバートに「これが私があなたに教えたかった秘密すべてだ，どちらにつくべきかはあなたが選ぶがよい」(《Voilà tous les secrets que je voulais t'apprendre. /C' est à toi de choisir quel parti tu dois prendre》107-8) と述べているし，モニームから庇護を求められたときも，彼はモニームに自分の思いを打ち明けながら，権限を悪用し（《abuser》），彼女の弱い立場につけこむ（《abuser》）ことを恐れている（II，2）[9]。

ミトリダートの自己同一性

このクシファレスの寛大さに対するミトリダートの特徴は，執念深く復讐する《venger》ことである。ミトリダートは40年の間，ローマに対し孤軍奮闘して「すべての王に共通の恨みを晴らしてきた」(《Vengeait de tous les rois la querelle commune》12)。ミトリダートのこの面は，ただローマのみならず身内にも容赦なく向けられ，ささいな疑いや嫉妬から，自分自身の息子や妃を殺してもいる（I，5およびIV，2）。

復讐者＝王であるミトリダートは，モニームとクシファレスの恋を知ったとき，二者択一のディレンマを経験する。一つは，彼の生涯の敵であるローマに復讐することを重視し，それを為し得る息子を温存しておくか，一方クシファレスまたはモニームを亡きものとし自分の感情に対し二人が加えた侮辱に復讐するかである。はじめにミトリダートはクシファレスへの復讐を考え（III，6），クシファレスはモニームに「私は彼の視線に差し迫る復讐を読んだ」(《J'ai lu dans ses regards sa prochaine vengeance.》1192）と危険を察知している。モニームの拒絶のあとの独白(IV，5)では，より複雑な心理が表現され，「出発に際し3人の裏切り者を同時に抹殺しよう」(《Immolons, en partant, trois ingrats à la fois.》1386）と決心するが，クシファレスから始めようと考えたあとで，「不幸にもおまえの息子を犠牲にしようというのか，ローマが恐れている息子を，父の仇を討てる息子を」(《Tu vas sacrifier qui, malheureux? ton fils? / Un fils que Rome craint? qui peut venger son père?》1394-5）と驚き，「私に必要なのは復讐者で，女ではない」(《J'ai besoin d'un vengeur, et non d'une maîtresse.》1400）として，モニームをクシファレスに譲ることを考えるが，モニームを愛しているので，それも出来ず，決心がつかないのである。

ミトリダートのこのディレンマは，ミトリダートの，ひいてはこの戯曲の二つの面，すなわちローマとの政治的対決という主題と，ミトリダートと息子クシファレスとモニームの恋愛関係という主題に即応している。最初に述べたように，戯曲『ミトリダート』において，この二つの側面は併置されているだけで統合されていないことがつとに指摘されているわけだが，美的完成の達成度はさておくとして，この二つの主題は，ミトリダートの復讐のディレンマにおいてともかく一つに重ねあわされ，このディレンマゆえにこの戯曲でのミトリダートは本来の彼の姿，すなわち政治・軍事的にも恋愛上も素早く復讐するもの《vengeur》たりえないでいる。

さらに，復讐が問題となる以前，すなわち落ちのびたミトリダートが登場し，モニームと再会する最初の第2幕第4場から，彼がつねにモニームの冷淡さという恋愛の問題を自らの政治・軍事的不遇と重ね合わせることをやめないことに注意したい。《Mes malheurs, en un mot, me font-ils mépriser?》(「つまりは不運ゆえに，私はさげすまれるのか」558）と冷淡なモニームをミ

トリダートはうらむ。あるいは，ファルナスからクシファレスも同罪ときかされ，《La foi de tous les cœurs est pour moi disparue? / Tout m'abandonne ailleurs? tout me trahit ici?》（「私への忠実はすべての人の心から消え去ったのか／すべてがかしこでは私を見捨て，すべてがここでは私を裏切るのか」1012-3）（III, 4）と嘆く。モニームもクシファレスも恋愛はさておき政治的にはミトリダートに従順であるのだから，恋愛と政治のこの混同はただミトリダートのみに発する。

第3幕第1場においてミトリダートが二人の息子に明かすハンニバルばりのローマ遠征計画も，最後にミトリダートがファルナスにパルティアの王女との戦略的な縁組を提案し，ファルナスの拒絶を誘いだし，それをモニームへの恋の証拠とすることによって，恋愛と結びつけられ，混同されている。

> Traître, pour les Romains tes lâches complaisances
> N'étaient pas à mes yeux d'assez noires offenses :
> Il te manquait encor ces perfides amours
> Pour être le supplice et l'horreur de mes jours.
>
> （「裏切り者，おまえのローマ人への卑怯な迎合も，私の目には十分腹黒い侮辱ではなかった。おまえにはまだこの不実な愛が欠けていたのだ，私の苦しみと恐怖となるためには」979-982）

ここでのミトリダートの語り口は，あたかもローマとの内通よりもモニームへの恋慕の方が罪が重いかのようである。

モニームの冷淡を自らの政治・軍事的不遇のせいにし，また恋愛の性向と政治的忠実を混同するミトリダートは，第4幕第4場でモニームを説得するときも，彼自身の恋を語るのではなく，かつての政治・軍事的栄光を語る。《Ne me regardez point vaincu, persécuté : / Renvoyez-moi vainqueur, et partout redouté.》（「破れ，迫害された私を見るな，勝ち誇り至るところで恐れられた私を思い出せ」1293-4）。そしてミトリダートのモニームの不実への非難は，すでに政治・軍事的逆境にある彼をより苦しめるということである。

> Attendiez-vous, pour faire un aveu si funeste,
> Que le sort ennemi m'eût ravi tout le reste,
> Et que de toutes parts me voyant accabler,
> J'eusse en vous le seul bien qui me pût consoler?
>
> （「かくも不吉な告白をするために，あなたは待っていたのか，敵対する運命が私か

ら総てを奪い去り，あらゆるところから責めたてられ，私を慰めうる唯一の良きものをあなたにだけ見いだす時を」1303-6)

このように少なくともミトリダートその人においては，政治と恋愛は，その逆境において，ディレンマにおいて，混然一体となっているように設定されている。そしてミトリダートの現実，つまり「打ち破られ，迫害された」(vaincu, persecuté) 逆境の対極には，過去の栄光，「勝ち誇り，恐れられた」(vainqueur, redouté) イメージがある。ファルナス，クシファレスら他の人物たちは，政治・軍事的天才としてのミトリダート，あるいは多くの愛人を持ち，彼女らをはじめ親族にも必要とあらば残酷な仕打ちを辞さない残忍なミトリダートの像を繰り返し強調している（例えばⅠ，5，Ⅳ，2）がしかし，現実のミトリダートは，彼が嘆くごとく，恋愛でも政治・軍事的にも逆境にある落ちた偶像に過ぎない[10]。この戯曲を通じてのミトリダートの行動はすべて，過去の栄光を現実に回復するための努力であり，これもまたモニームの努力同様，自己の同一性，一貫性を保つための努力と言えよう。

しかしそれらの努力は，ミトリダートの場合，すべて裏目に出て，ミトリダートの置かれた状況は，戯曲の進行に伴い，困難さを増していく。政治・軍事面から言えば，ミトリダートはⅢ，1でその雄弁を情熱を傾けて起死回生の奇策であるローマへの長大な遠征計画を明らかにするが，その計画そのものが，ファルナスによって兵たちに知らされたとき，疲弊した兵たちをミトリダートから離反させる原因となるのであり，第4幕の終わりでミトリダートは自軍の反乱とローマ軍の双方に取り囲まれるという窮地に追い込まれる(Ⅳ，6，7)。ここでは，監禁させたファルナス（Ⅲ，2）が衛兵を篭絡して脱走し，ミトリダートの兵たちを扇動しているのだが，ラシーヌの悲劇の世界では，普通権力者の命令（の言葉）はその実行にほかならず，権力者の命令がこのような形で実行されそこなうことがそもそも珍しいことであり，言葉とその遂行の表裏一体性が権力の実質である以上，ミトリダートの権力の形骸化あるいは『ミトリダート』の世界における権力の相対的な弱さを示している。

一方，恋愛の面から見れば，モニームとファルナスの仲を疑うミトリダートは，彼女をクシファレスに監視させ（喜劇の常套手段的状況との類似がつとに指摘される，アイロニーに満ちた状況である)，そうとは知らずに相愛の二人に告白の機会を与えてしまう（Ⅱ，5)。次に策略を弄してモニームに本心を告白させるが(Ⅲ，5)，そのために彼女が義務として承知していた結婚を拒絶するに至らせてしまう(Ⅳ，4)。モニームを婚礼の祭壇に連れて行こうとしてミトリダートは，「これが最後だ，来い，私があなたに命令しているのだ」(《Pour la dernière fois, venez, je vous l'ordonne.》1316) と言うが，この命令もすでに述べたように死を覚悟して自己の言動の一貫性を貫こうとしているモニームには全く効力を持たず，遂行されえず，ミトリダートの権力の形骸化を示す。

結局この戯曲においてミトリダートは，失いかけた英雄としての自己を回復しようと一貫して努力するが，これらの努力は上述のようにすべてが逆効果をうみ，モニームは結婚を拒絶し，ファルナスは謀反し，兵は離反し，ミトリダートは第2幕登場に際し有していたごくわずかなものも失って第4幕最終場に至っており，この戯曲の主要な興味は，ミトリダートの自己同一性を巡る闘いとその見事な，『オイディプス王』を思わせる逆効果にあると言えるだろう。そしてこの最後の状況においても，ミトリダートは，前述のディレンマのために本来の彼である復讐者《vengeur》たることが出来ない。モニームの拒絶に途方にくれたミトリダートは，

> Elle me quitte! Et moi, dans un lâche silence,
> Je semble de sa fuite approuver l'insolence!
> [...]
> Qui suis-je? Est-ce Monime? Et suis-je Mithridate?
> (「彼女は去っていく。そして私は卑怯な沈黙で，彼女の高慢な退去を容認しているかのようだ，[……]私は誰なのだ，あれはモニームなのか，私はミトリダートなのか」1379-80，1383)

と自問する。この「私は誰なのか，私はミトリダートなのか」という問いは，彼がここで直面している逆境にある英雄としての，そしてまたディレンマのために復讐者たりえない，二重の自己同一性の問題を要約していると言える。

政治・軍事問題と恋愛問題の併存のほかに，結末に対する批判の声も強いことは最初に述べたとおりである。第5幕最終の第5場でミトリダートは，ローマ軍を撃ち破ったクシファレスに感謝し，モニームとクシファレスを結びつけ，二人にやがて再び反撃に転じるであろうローマ軍から逃げのびることを勧め，ファルナスとローマ軍に復讐することを禁じて死ぬ。この突然の寛大さという心理的変化に充分な説得力が欠けているのである[11]。しかしながらこの結末は，説得力や美的完成度の評価はともかくとして，ミトリダートの自己一貫性の危機という視点から見れば，ある程度の整合性を備えていると言えるであろう。つまり，この結末を説明できるのは，ただ，第5幕における戦闘の結果，ミトリダートがローマに対する勝者として，すなわち再び英雄となり，自己同一性の危機を脱して死ぬという事実だけであろう。ミトリダートは，

> J'ai vengé l'univers autant que je l'ai pu :
> La mort dans ce projet m'a seule interrompu.
> (「私は能うるかぎり世界の仇を討った。死だけが私の計画を遮った。」1653-4)

と自己の生涯を振り返る。II，2で登場して以来，死に損なった敗残の落ち武者であった偽りの英雄は，再び英雄となり品位，尊厳を，英雄としての自己同一性を取り戻している。死さえも自己同一性を失うことに比べれば大きな損失，あるいは挫折ではない。彼は尊大な身振りでクシファレスに感謝し，

> Il épargne à ma mort leur présence importune.
> Que ne puis-je payer ce service important
> De tout ce que mon trône eut de plus éclatant!
> (「彼（クシファレス）は私の死に際し，うるさいローマ軍を追い払ってくれた。この大切な務めに私の王国でもっとも輝かしいもので報いずにはいられない」1668-70)

とし，感謝のしるしとして，あたかもモニームとクシファレスの恋愛などなかったかのように，モニームを彼に贈るのである。

> Vous seule me restez : souffrez que je vous donne,
> Madame;et tous ces vœux que j'exigeais de vous,
> Mon cœur pour Xipharès vous les demande tous.
> (「あなただけが私に残っている，私があなたを贈ることを許してくれ，そして私があなたに求めた誓いすべてを，私はクシファレスに向けるようにあなたにたのむ。」1672-4)

このようなミトリダートの自己認識はラシーヌ悲劇の人物の自己認識の常として客観的で正確とは言いがたいし，また既に触れたように批評が疑問視しているこの結末の完成度の問題は残っているが[12]，ともかくこうして偽の英雄であったミトリダートは，英雄としての自己同一性を取り戻すべくすべて逆効果の「悲劇的な」試みを繰り返したあげく，最後に再び英雄として，あるいはより正確に言うならば英雄としての自己を誇示しながら，死ぬことに成功するのである。こうして『ミトリダート』は，モニームのそれを内に含みこむ，自己同一性についてのドラマである，と言えるであろう。

最後に我々はこの結末について以下のことを指摘しておきたい。まず，この結末はクシファレスの軍事的勝利とミトリダートの自殺という二つの行動の結果であり，クシファレスの勝利の方はいわば偶然の産物で，ミトリダートの唯一の実効を伴った行動は彼の自殺であるということである。『ベレニス』を除く総ての悲劇は，第5幕において，言葉の世界から力と力が直接ぶつかり合う暴力の世界へと移行するが，その決着は多かれ少なかれその世界の権力を反映しており，ま

た『バジャゼ』のアミュラの命令，『フェードル』のテゼの祈りのように，多かれ少なかれ権力者の言葉の刻印を押されていることが多い。ところが『ミトリダート』の暴力の特徴は，その世界における権力の崩壊，アナルシズムを反映して，ローマ軍，クシファレス，ミトリダートの手勢の勢力が拮抗し，その決着は全くの偶然に委ねられたものとされている。このような状況においてミトリダートの唯一の実効ある行動は彼の自殺である。ミトリダートはまず毒を試し，次に剣を自らの胸に突きたて，即座に死ぬことが出来ないでいるが，これはこの戯曲そのものが，夜襲にあって命からがら逃げのびた英雄が追い詰められ実際の死に至る過程を扱っていることと対応していると言えよう。そしてまた，悲劇の世界で権力を失ったミトリダートが，彼の悲劇に決着をつける唯一の方法は，ちょうどもともと権力を持たないモニームにとってそうであるのと同様，自殺しかないということに注意したい。『ブリタニキュス』から『フェードル』に至る六編において自殺する人物は，『バジャゼ』のアタリード，このミトリダート，『イフィジェニー』のエリフィール，そしてフェードルであるが，ミトリダートとフェードルはこの自殺において自己を回復するという点で，意外な相似を示している。本論の冒頭ではプロットの秘密とその倫理的処理を巡って，『バジャゼ』『ミトリダート』『フェードル』の類似と相異を指摘したが，この自己同一性のテーマも発展，継承され，言わばモニームとミトリダートの双方を合わせ持つようなフェードルに結実していくと言えるであろう。

註

1） Raymond Picard, *Présentations aux Œuvres Complètes de Jean Racine,* éd. de la Pléiade, Gallimard, tome I, p. 595.

2） Antoine Adam, *Histoire de la Littérature française au XVIIe siècle,* Paris, tome IV, pp. 351-6.

3） Cf. Raymond Picard, *La Carrière de Jean Racine,* Gallimard, p. 175 et sq.

4） Raymond Picard, Op. cit., p. 599.

5） Roland Barthes, *Sur Racine,* éd. du Seuil, p. 108.及び，Lucien Goldmann, *Le Dieu caché,* Gallimard, p. 401 を参照されたい。

6） ラシーヌ『ミトリダート』本文からの引用は，*Mithridate,* Nouveaux Classiques Larousse により，便宜上その行数と日本語訳を付した。日本語訳は，田中敬次郎訳『ミトリダート』，ラシーヌ戯曲全集第2巻，人文書院，及び渡辺守章訳『ミトリダート』，ラシーヌ戯曲全集第2巻，白水社を参考にした。

7） モニームに対する賛辞の代表として，アンヌ・ユベルスフェルトのそれを挙げておく。《A ce personnage extraordinairement riche et chargé de sens, Racine oppose la plus merveilleuse des victimes, le plus réussi peut-être de ces personnages féminins dont la beauté brisée sert le pathétique de la tragédie : [...]》 Annie Ubersfeld, *Manuel d'Histoire littéraire de la France,* tome II, 3e partie, Racine, Editions Sociales, p. 304.

8） 「透明」／「不透明」，「能視」／「非能視」の対立については，小論「*Britannicus* における劇的ア

イロニーとその機能」,『仏文研究』12号，京都大学フランス語学フランス文学研究会，1983を参照されたい。

9）こうしたクシファレスの人物像については，あまりにも17世紀フランスの宮廷貴族の理想に近すぎるという非難がテーヌをはじめ繰り返されている。また，寛容寛大なクシファレスではあるが，父ミトリダートに柔順であればあるほど，父に倣って復讐者とならざるをえない面もある。

10）アラン・ニデルストは，ミトリダートのこのような面を解説して，《Ce faux grand homme est aussi un faux méchant.》と述べている。Alain Niderst, *Les tragédies de Racine, Diversité et Unité,* Nizet, p. 109.

11）アントワーヌ・アダンは註で次のように述べている。《Dans cette œuvre si belle, le dénouement étonne un peu et, pour tout dire, déçoit. On n'attendait pas de Mithridate tant de générosité》. Antoine Adam, Op. cit., p. 355.

12）ロラン・バルトはこの結末におけるミトリダートを，自己欺瞞として鋭く突いている。Roland Barthes, Op. cit., p. 108.一方予告されたミトリダートと現実のミトリダートの落差に注目するアラン・ニデルストは，この戯曲のテーマを老いと考え，それにより結末が説明できるとしている。Alain Niderst, Op. cit., p. 109.